

適正施設ガイドライン

【ホクリクサンショウウオ *Hynobius takedai*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

1 飼育環境

1-1 成体の飼育環境

1) 気温・水温

気温 15～22℃程度が適している。高温に弱く、気温が 25℃を超えると危険。そのため、クーラー（空調）、冷凍機、冷水（井水など）のかけ流しなど、なんらかの冷却が必要。加温は基本的に不要だが、気温 10℃以下になると摂餌が不活発となるため、成育が悪くなる。繁殖させる場合、冬季までに水温を徐々に下げていき、10℃程度にする。温度を保つために断熱材の使用が効果的。

	最高 (°C)	最低 (°C)
水温	20	8
気温	25	8

2) 照明（日照・人工照明・照明時間長）

夜行性のため、バックヤードでは室内作業用照明以外に照明は特に必要ない。展示水槽は、観賞用のために蛍光灯などを使用するが、気温上昇を抑えるために発熱の少ない LED 照明等が推奨される。日長は、繁殖をさせる場合は季節変化に合わせる。

3) 飼育施設の面積、容積

3 飼育園館での各飼育施設の飼育面積は、600～5225 cm²で、1 個体あたり 77～1069 cm²である。1 個体あたり、全長の 2 乗程度の床面積があれば飼育可能である。つまり、全長 10 cm であれば 100 cm²。1 個体ずつの個別飼育が理想であるが、複数飼育も可能である。その場合、サイズ差があると、小さい個体を餌と間違えて捕食することもあるため、複数飼育は同程度のサイズ同士の個体で行うようにする。複数飼育時の床面積の目安は、全長 10 cm であれば、1 個体あたり、120～150 cm²程度。飼育密度が高くなると、床材や水質の悪化による病気の発生、餌と間違えての咬傷、採食不良による削瘦個体の出現が起こりやすくなるため注意する。飼育ケースは小型のプラスチックケースで飼育が可能である。活発な立体活動は行わないので、飼育施設の最低限の高さは床面から体高の 3 倍程度以上あればよい。飼育施設の高さがある場合、擬岩や石、流木などを組んで表面積を増やすことで、飼育可能個体数は増える。シェルターが少ないと床面積が広くてもそこに集中してしまうため、隠れる場所を多く用意するとよい。

4) 床材・水場

湿度を保持するために赤玉土や、水で湿らせた乾燥水苔等を使用する。厚さ 3～5cm 程度で全体を湿らせ、水深はその 50～80%ほどにする。繁殖させない場合、水場は不要。循環装置のある比較的大型の水槽では衛生管理が容易な砂利を使用している。その場合、砂利の粒の大きさは誤嚥できない大きさか、誤嚥した場合でも排出できる大きさにする。適度に湿度を保つように水場だけでなく陸上部分にも水を流すなどの工夫をする。繁殖期の 1 月～3 月とその前後以外は、ほとんどの時間を陸上で過ごす。通常期では水深 0～10 cm。ただし、0cm でも床材は湿っているようにする。繁殖期には水深を 15～20cm 程度にして、産卵する環境を整える。

5) 蓋

垂直の壁も登ることもあるので、蓋は必要。適切な湿度 (60～80%) を維持する程度に、プラスチック容器であれば蓋に穴あけ加工をする。水槽であれば、部分的にプラスチック製網などで通気を確保するか、パンチングボードなどを使用する。

6) 水質・水質の管理

脱塩水を使用する。止水飼育では飼育密度にもよるが、週に1~2回程度の換水。循環濾過装置がある場合でも飼育密度にもよるが、週1回程度の部分換水を行うことを推奨する。

7) レイアウト・シェルター

夜行性で物陰に隠れる習性があるので、植木鉢の欠片や、石、底面濾過用の板、流木、枯葉、生きているシダやコケなどの植物を配置する。野外から水槽内に入れる場合、水道水でよく洗うなど、病原菌を持ち込むリスクに留意する。

参考・引用文献

日本の爬虫類・両生類飼育図鑑 大谷勉 著 川添宣広 編・写真